
あいつさえいなければ

ハウロム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あいつさえいなければ

【Nコード】

N9070U

【作者名】

ハウロム

【あらすじ】

高三の夏

俺は全力で現実から逃げていた
その先に待っていたものは

ブログ（前書き）

初投稿、しかも遅筆、なおかつ思いつきで投稿しました。
生暖かい目でご覧下さい。

ブローグ

そう妄想したことは誰にだってある。

高校の、しかも三年の夏。一般的な進学校ならば誰もが将来について考えているであろう季節。俺は何も考えてはいなかった。考えることから逃げていた。

親には学校で勉強をしていた、部活で遅くまで練習をしていた、友人の通う予備校で勉強していたなどと、当然のように嘘をつき、現実から逃げた。

「常識的に考えて、受験勉強すればいいじゃない。」

友人は皆決まってそう言うが、俺だって別に勉強が嫌いなわけではない、はず。

怖いだけだ。

頑張ったから実らなくてもそれは無駄にはならない。そんなことを言う奴ばかり。お前らは何もわかつちやいない。

いや、違う。

勉強をしない方がもちろん後々とりかえしのつかないことになるだろう。勉強しなかったことではなく、現実から逃げたことが。

「生きてりゃなんとかなるよ。」

生きるってことは逃げないことではないのか。生きた心地がまるでしないとはまさに今の状態を言うのであれば、俺は死んだも同然ではないのか。

そんな不毛な脳内会議を今日も繰り広げ、時間だけが過ぎていく。

おまえってやつは

コンビニでの立ち読みは捗る。誰かに邪魔されなければの話だけれど、にやけた友人が近づいてくる。

「てめえ本当にどうしようもねえな。こんなところで油売ってる暇あったら何かについて考えてみる。何を考えるかって？自分で考える馬鹿野郎。」

うるさい。ちょっと授業をサボって立ち読みしてたらこれだ。そう言うお前も人のことが言えるのかと問いたい。

「俺は、自転車こいでたらあさんが重そうな荷物一人で抱えてたから駅まで送っていったんだ。それでこんな時間になったんだ。おれは悪くない。」

いまだきその設定は胡散臭すぎて逆に信じられる、と言うとでも思ったかアホ。

「世の中に意味のないことなんてないですよ。とか語ってたのはだれだっけか、仮にばあさんの話が嘘だとしてもだ、お前に馬鹿にされる覚えはない。」

リフレク。

「ほう、倍返しか、これは捗るな。」

意味がわからない。お前捗るって言いたいだけだろう。

「それは言わない約束だ。」

こんなことを朝っぱらから話していたので一時間目に間に合わず、かといって廊下ですれ違う教師から何を言われるでもなく、休み時間間に忍のごとく何事もなかったかのように席に着いた。

夏に風なんぞ要らない。クーラーがあれば生きていける。幸い全教室にそれは完備されており、7月にもなるとそれは全力で、汗水垂らして通学してきた僕の睡魔に起きるとわめくのだった。

ほら、気付けば昼休みだ。誰も起こしてくれなかったのか、起きると言われても起きなかったのかはわからないが、すでに教師の姿

はなく、ついでに友人も見当たらず、ああ、食堂に行けば彼ならきっと席を取っていてくれるだろうと、暢気に教室を出た。

で？っていう

昼休みの食堂は満員電車に似ていると思う。一人の人間を探すと
なればそれは困難だ、普通ならば。

「おい、こつちだこつち。」

人ごみでの喧騒の中で、良くも悪くも通るその声に吸い寄せられ
るように彼に近づいていった、ありがたい。

「お前が寝てるから先に場所取つといた。感謝の印として今日の昼
飯はお前の奢りつてことで。」

ありえない。ありがたいが、その程度で少ない小遣い減らされて
なるものか。

「そういうとは思つたよ、貸しということだろうだ。」

いつ返すかわからんがそれならかまわん、んじゃ飯でも食います
か。

「いただきますか。」

ここの食堂が混んでいる理由はそのメニューの豊富さと安さにあ
る。姉貴の高校に忍び込んだときの静けさといったらここに比べれ
ばありえないほどの内容だった。

今食べているカレーもその高校とは比べられないほどだ。むこう
はただのレトルトだったがここは異様に凝っている、気がする。単
純に美味しいだけではなく何か不思議な美味しさがある。人気の一
つである。

「ここのメニューってどれもなんか不思議な美味さだよな。」

全面的に同意できる。何か吸い寄せられるような、具体的に表現
できない美味さ。何か如何わしいものでも使っているんじゃないか
と疑いたくなる。

「まあここは作り手がおばちゃんじゃなくお姉さんつてもポイン
ト高いよな。」

確かに。

僕が通っている高校は規則は厳しい方だがこの食堂でのバイトは認められていて、授業体系も自由が効くので結構な数の女生徒がここで働いている。

「女子高生の手作りつてのがまた素晴らしい。」

今がそんなにいいものとも思えないが、数年後にはここに通いたいと間違いなく思ってるだろう。実際、私服姿の大学生やらサラリーマン風のおっさんがちらほら見受けられる。食堂が校門と隣接していて一般人でも利用できるのがまた混雑の一つなのだろう。

「特にレジにはまた可愛い子揃ってるよな。ほら、あれうちのクラスのおっぱいじゃね。」

トップというのはもちろん学力じゃなく容姿だ。会話した記憶はほとんどないので性格はわからないが愛想の良い笑顔を振舞っている。彼氏がいたら全力でローキックを叩き込みたい。

「間違いなく返り討ちにあうだろうがな、おまえそもそも格闘技なんてやってたか？」

妄想の中に決まってるんだろうが言わせんな恥ずかしい。

昼休みは順調に過ぎていく。昼飯を食ってますます勢力を拡大した睡魔に抗うすべはもはやない。素直に降伏するでしょう。

「お前は相変わらず屑だな」

チャイムが鳴った。ほぼ同時に喧騒が教室を包む。授業が終わったらしい。らしい、というのはずっと寝ていたので始まりと終わりの区別ができないからだ。

友人が近づいてくる。にやけ面が気持ち悪い。

「何が気持ち悪いだこのやろう。」

声に出していたか、気持ち悪いものは仕方ないだろう。

「お前の寝顔も相当だったがな、教師に何を言われてもうんともすんともせず頭はたかれた時のお前の不満そうなぐすり顔もなかなか気持ち悪かった。」

そんなに熟睡していたのか、まあ起きなければと思い込まず寝たらこうなるんだ。後悔も反省もしていない、今のところは。

「そんなんで勉強は大丈夫か？大丈夫なわけなさそうだが。」

今は全力で逃げているからな、そのうちなんとかするだろう。

「なんとという無関心さ、いずれ後悔するぞ。」

だろうがな、今じゃない。

「まあ頑張れ。」

適当に締めて彼は自分の席に戻っていった。飽きたのだろう。他の同級生が作っていた輪に入っていく。談笑が聞こえる、良い子守唄だ。まだ寝足りないらしい。大人しく睡魔に頭を垂れる。

最近はずっとこんな毎日だ。何かしなければ、とすら思わないように逃げている。睡眠は良い逃げ場だ。睡魔とも良好な関係が続けている。このまま変わらないことを願うし、変わることをそれ以上に願う。

そんな装備で大丈夫か？

あくびを一つ、今日の授業も無事終わった。この現状、誰かが変えてくれるのだろうか、そうであつたならばどれほど楽だろう。

「部活行こうぜ。」

友人がだるそうに話しかけてくる。その顔を見るだけでこちらもだるくなってくるが、他にやることもないし、行きますか。

俺は水泳部に所属している。仮入部の時、まだ未来に焦がれていた時期、色々な部活を体験したが、屋上に設置してあるプール、そこから観る景色と同期の少なさ、スイミングスクール及び中学生の時も水泳部だったことを踏まえてこの部活に所属している。

水の中はとても落ちつく。泳ぐことそれ以外何も考えなくていい。一年生の時は厳しい先輩のもと泳ぐこと以外考える余裕がなかったが、今となつてはその面影もなく、とてもだらけている。バスタオルを敷いての麻雀にも慣れた。

友人とはそこで出会った。自己紹介の時、自分に似た空気を感じたことからこいつとはうまく付き合つて行けるような気がしたがここまでになるとは思っていなかった。今では冗談を冗談とお互い認識できる程度には仲がいいと、思う。

「お前今日も一日寝てたが、寝すぎてしんどくないのか。」
当たり前だ。しかし今ではこの気だるさも心地良いと感じているので相当の重症と言える。水に入れば嫌でも眼が覚めるし、泳いだら疲れるから家でも普通に寝れるし。

「もういい。」

「「もういい!!」「」」

いつものやりとりをこなし今日も部活に励む。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9070u/>

あいつさえいなければ

2011年11月15日17時32分発行